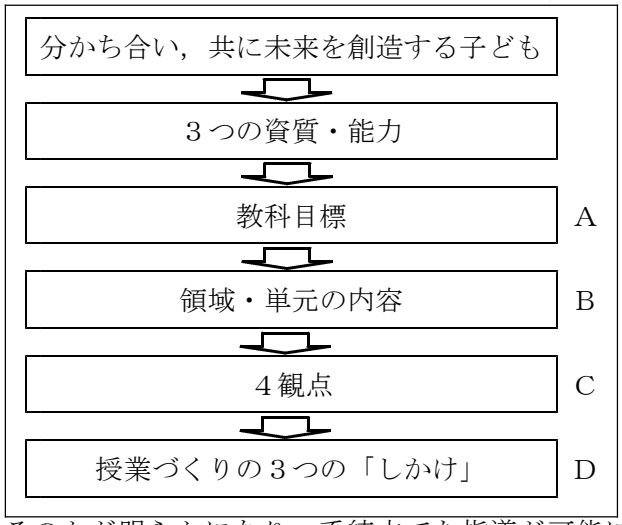
堀場実践【第3学年 算数科】
～ 重さ ～

本実践の主張点

自分にとって意味のある知を生み出す見方・考え方を育むために
提案Ⅰ　教科内の同領域で育みたい見方・考え方をまとめ，本単元・本時をカリキュラム上に位置付けることで，系統的な指導に生かす。
提案Ⅱ　単元の課題の中に態度を含めた自己評価に関わる内容を入れ，子どもと共有を図ることで，子どもたち自身で自らの伸びを実感することができる。

カリキュラム全体と教科，単元，領域，本時の関係を整理する

堀場提案では，下図のように，カリキュラム全体から本時に至るまでの学びの過程の関連付けが行われた。資質・能力を育成することにつながるように教科目標が設定され，それが領域や単元の目標となり，その目標が達成できたかどうかを４観点で見て取る。さらに，その４観点が姿として表出できるように授業づくりの３つの「しかけ」を行っていく。このように育みたい資質・能力から本時の学びまでを一体的に考えておくことによって，本時の学びが教科内容の理解のみならず，資質・能力を育成することにつながっていくという提案である。カリキュラム全体から単元に至るまで，「何を」「どのように」「どう学ぶのか」という視点で整理していくことにより，教科の特徴や内容の系統，具体的な指導・支援の方法が明らかになり，授業改善につながるのだということである。ここでは目指す資質・能力を考慮に入れた上で，Ａ～Ｄの順に，逆向きに授業構想を行うことが提案されている。各段階における整理は以下の通りである。



Ａ：**算数科の目標**
・算数科における「何ができるか」にあたる。４観点を意識して設定する。
Ｂ：**各領域の内容**
・算数科における「何を学ぶか」にあたる。各領域を類似する見方・考え方でまとめる。
Ｃ：**単元の内容**
・Ｂと同じく，算数科における「何を学ぶか」にあたる。単元の課題の中に資質・能力を意識した内容を織り込む。（提案Ⅱと関連）
Ｄ：**授業づくりのしかけ**
・「どのように学ぶか」にあたる。評価の４観点や「子どものものさし」が発揮できる状況づくりを行う。

このような整理を行うことによって本単元や本時がカリキュラムの中にどのように位置付いているのかが明らかになり，系統立てた指導が可能になるといえる。新たなカリキュラムに挑戦している今だからこそ，従来の目標や内容への迫り方との違いを明確に示していくことには価値がある。しかしながら一方で，このような整理を行うことが，子どもの学びの姿にどのように寄与していくかということについても本時の中で見せていくことが大切である。整理をすること自体に価値を置くのではなく，それによって子どもが姿として変容していくという事実が，論に説得力をもたせていくことになると考える。

振り返りの積み上げを通して伸びの実感を促す

今回の教科学習の提案では，本校がこれまで大切にしてきた単元の課題について改めて考え直されている。本単元における単元の課題について以下に示す。

「長さ」や「かさ」のように，実際にさわるなどの体験や友達の意見を生かし，新しい視点を見付けていきましょう。「重さ」を学んで，世界を広げていきましょう。

単元の課題の中に「主体的な態度」「共感・協同的な態度」「見方・考え方」に関わる子どものものさしを組み込むことで，子どもは特に意識しなくとも，振り返りの中で学び方に関わる態度についても表出・認知しやすくなるという考えからである。実際，子どものノートからは上述した観点に関わる表現をたくさん見て取ることができた。今後はさらに，そこで見取った子どもの実際に対して，どのような指導につなげることで子どもは伸びの実感に至ることができるのか，評価と指導の関係についても明らかにしたい。

成果と課題

○　視点の整理により，資質・能力を育むことにつながる授業づくりの方策が明らかになった。
△　提案や主張点と，授業時間における子どもの具体的な姿や変容との関連が見えやすいとよい。

実践日 2015/10/19

The Futaka Spirit

(現教だより第１９号)

３年　算数科
単元名　「重さ」

指導者　堀場　規朗　先生

堂々と意見を出し合いながら，和気あいあい，意欲的に活動に取り組む子どもの姿が見られました。よりよい方法を吟味していく過程の中で，多様な見方・考え方が育まれる過程を見て取ることができました。

【子どもの活動】

1　本時の学習課題を把握する。

各グループで重さの基準を確認する

試行錯誤をしながら１kg をつくる。

2　計画を立て，1kg づくりを行う。

3　結果を交流し，さらによりよい問題解決の方法を探る。

結果を交流し，問題点について考える。

よりよい解決方法を考え，話し合う。

4　交流した視点をもとに，再度1kg づくりを行う。

5　本時のまとめをする。

新たな考え方で再び１kg をつくる。

自己評価を観点別に整理する。

（文責　橘　慎二郎）

【堀場先生コメント】
今回，体験を通して感覚である量感を養うとともに，重さの学びから新しい世の中が垣間見えたらという見方・考え方を育てる取り組みをしました。やはり子どもは実感を伴うことでより深く学べたように感じます。今後は子どもが自己を評価して少しでも自分を成長させたいと思えるような態度を育てていきたいと思います。ありがとうございました。